
「生体兵器の少女 Z」番外編～それからのあたし～

鳥山and矢吹and尾田先生が神！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「生体兵器の少女 Z」番外編〜それからあたし〜

【Nコード】

N1032Z

【作者名】

鳥山 and 矢吹 and 尾田先生が神！

【あらすじ】

「生体兵器の少女 Z」番外編。

もとの世界にもどったのに、孫悟空とブロリーが、この世界に逆転生！ブロリーを倒すという短編バトル。そして、まさかの展開！本編を見てからどうぞ〜

1

あたしは、次元魔王と戦ったあと、元の世界へと戻った。

あたしは、ドラゴンボールがますます好きになった。

弟も、ドラゴンボールの劇場版やらのDVDを時々レンタルして見ている。

二人とも、イヴとトランクスではなくなっただけど、孫悟空に尊敬の眼差しで見ている。

いつでもいつでも、努力を惜しまず、純粹に物事を行う彼は、誰が見たって、英雄であるはずだ。

「はぁ……。また、会いたいなぁ……」

そう思っていた矢先だった。

2

ズドオオオオオンッ……………

突然、地響きが聞こえた。

このご時世、不謹慎だと思われるかも知れないが、まさしく、地響きだ。雷のような音と共に、大気が振動していた。

「雷……。？空、晴れてるのに……」

そう。今日は、晴れていた。

雷が鳴るとは到底思えない明るさだった。

車か何かが事故でぶつかった音？それにしても、遠い場所の音だったし、遥かに大きい音だった。

ドドドドドドドドドドドドドドド

続いて、連続的な破壊の音が流れていた。

「え・・・な、なに！？この音・・・。普通の音と、明らかに違う・・・！！」

その音は、聞き覚えがありすぎだ。

「気攻波の・・・音！？」

気攻波が、建物や岩などにぶつかった時の、鈍い音だ。

しかし、この世界は、漫画やアニメの世界じゃなく、普通の世界だった。

どうして、いや、誰がこんな真似を・・・？

#3

ビュンッ！！

まさしく、その音がぴったりの一瞬、その瞬間だった。

「あれ・・・！？イヴの気があるから、瞬間移動で来たのに！。人違いか」

「う、悟空さん!？」

「うん。絶対にイヴの気だと思ったのにな」

「悟空さんっ!!」

「ほえ!？どうしてオラの名を知ってるんだ!？」

そう、目の前に現れたのは、孫悟空、その人だった・・・。

「いや、あたし、イヴですけど・・・」

「え!？ほんとか!？いや」。髪とか背とか全然違うから別人かと思っただけ」

あたしは、本来、髪の毛は短い。

それに、少し茶色がかっている。

そして、問題は身長だ。イヴの体は、老化や成長が、ナノマシンによって止められているらしく、身長も体重も、変化がなかった。

いやいやいや、問題はそうじゃなくって!!

「なんで悟空さんがこんなところにいるんですか!？」

「いや。それがさ・・・」

簡単に話すと、

「ブロリー襲来ってわけですね。どうしてあたしたちの次元にまで影響が・・・!」

「北の界王様が言うには、イヴたちの力も借りて戦うらしいな。すつごく強いんだよ。ブロリーは・・・」

でも、あたしはまだ、イヴの体にはなっていないわけで・・・。

「でも、気を見たらわかるでしょう・・・？あたし、今はサイヤ人でもなければ、気を大きくすることも出来ないんですよ・・・」

「それは大丈夫だ。今から、オラとフュージョンするんだ。そうすれば、イヴの力も戻るらしいぞ」

「ほ、本当ですか!？」

どうやら、もう一度、別次元の人間を触れると、再びそのときの力が手に入るらしい。

や、ややこしい設定だなあ・・・。

まあ、フュージョンすれば、全てわかるってことで・・・!!

フュー~~~~~ジョンッ!!!

4

「おお・・・本当だ・・・!」

なにやら、力が元に戻った気が・・・。

ただ、これまで、ずっと平和な暮らしだったせいで、ブランクがあ

るっばい。

しばらくは、悟空の力を借りなくては……。

「そんなじゃ、ひとつ走り行つてくつか!!」

「カカロットオオオツ!!」

ブロリーは、ひたすら、高層ビルを破壊し続けた。
そうだ。ここは首都圏。

下手したら、自衛隊やらの大騒ぎになりかねない。

「ブロリー!!ここでは場所が悪い。場所を変えないか……?」

「カカロット?違う!!カカロットオオオ!!」

「へっ。カカロットにあいたけりゃ、こっちにこいよ……」

そういつて、ブロリーを誘う。

すると、意外にも着いてきてくれた。

「こつちだ……」

首都圏を抜ける。

やがて、山で険しい場所に来る。

そこを空から通り抜け、特徴ある形の島を通り過ぎ、海を通過した。

そして、平原地帯を通過し、

「ここならいいだろ・・・」

そこは、砂漠地帯だ。

一般人は立ち寄ることの少なそうな、砂漠を選んだ。
無関係な人間を巻き添えにするのは、好きではない。

「カカロット・・・。カカロットはどこだぁあ!!」

「まあそうあせんな。あと10秒だ。10、9、8、7、6、5、
4、3、2、1!!」

それは、もちろん、フュージョンが解ける合図だ。

#5

「さあて、そろそろお前をたおさねえと、体力的にも辛いしな」

「やりましょう。悟空さん」

あたしも、イヴの体に戻ることができた。

あとは、全、エネルギーを放出し、ブローリーを倒すだけだ。

「おい、イヴ。今から元氣玉を作るから、ブローリーの気を引いてくれないか・・・?」

「はい。やってみます」

そう言うや否や、あたしは、超久々の変身をした。

トランス
変身
ビームガン
光線砲

「おりやつ!」

エネルギーを放出する。
そうそう、こんな具合だった。

「ふん。ゴミめ!邪魔をするなっ!」

しかし、ブロリーの放つ気の強さは、半端じゃなかった。

「うわああああ!」

「イヴ!?!」

破壊力は絶大で、すぐ全身が痛む。
そーいや、こんな感じだった気もする。

「よし!そこまでするんだったら、あたしも本気になってやる!

はああああああああああああ!!!」

気がみるみる膨らむ。

この感覚も久々だ。

パワーはぐんぐん上がり、超サイヤ人3になった。

「ふうっ。いくぞっ!」

「カカロットオオオ！」

あたしは、接近戦を選んだ。

ゴールドラッシュ
黄金の連弾！！

しかし、ブロリーは、四つの手から放たれるラッシュを、全て受け流し、

「むんっ！！」

「かはっ・・・！！」

鳩尾に強烈な一撃をくわえられた。

痛いっ。

この感覚も久々だった。

痛いなんてものじゃない。

全身砕けたかと思った。

「つつう……。忘れてたなあ……。この感覚……。！」

「死ね……。クズが！」

ブロリーの右手に、緑色の気弾が溜まる。

あれに当たれば、ただではすまないのは必須だ。
さて、どうすれば。

「くたばれっ！！」

ズガアアアア！！

緑の気弾があたしを襲った。

「くっ！！」

稲妻ラツシュ！！！！

ズバツズバツズバツズバツ！！

「い、イヴっ！？」

「あたしなら、平気です」

雷鳴豪豪刀らいめいこうとうを使い、さっきの気弾を粉々に粉碎した。
はずだったのに、

ピキッ

ギギギギギギ

ゴギイイン・・・

刀もへし折れた・・・。

「やっぱり。それほど強力な技だったんだ・・・」

「・・・・・・・・」

恐ろしい技だ。

ついさっきまでの攻撃に、あたしはヒヤリとした。

あゝんなものに当たったら、死んじゃいますよ。
ホントに!!

「悟空さんっ。元気玉はまだ完成しないんですか？」

「わりい。まだブロリーを倒すまでのパワーじゃねえんだ。もう少し、もう少しなんだ……！」

今集まってる気、ナメック星で使ったそれと比べると、

「10倍はあるのに……」

そう、少なく見積もってナメック星で使ったときの10倍のパワーを持っているその元気玉でも、ブロリーは倒せない。もっとも、あたしは界王神界で戦ったことがないから、魔神ブウ編のときの元気玉はどれくらいか知らない。
それでも、ここまで、大きいのに。

「よしっ。本気中の本気で戦うよっ!!」

トランス
変身
ハンマー
大槌

ハンマー
大槌を振り回して攻撃をするが、ブロリーの、膨れ上がった筋肉には、全く歯が立たない。

トランス
変身
ランス
槍

槍でも攻撃してみるが、見事にかわされ、蹴りを決められてしまう。

「かゝめゝはゝめゝ波！！！！」

超サイヤ人3のパワーで使ったかめはめ波で攻撃したのに、

「むんっ！」

気合だけで飛ばされた。

「ふうう。バケモノめ」

「バケモノ・・・？違う。俺は、『悪魔』だっ！！」

衝撃というのにふさわしい、破壊力がすさまじいラッシュをあたしにぶつけた。

「うぎゃっ！！」

地面に叩きつけられ、気を失いそうになる。

そして、最後に気攻波を受けたところで、気を失った。

6

「おっ。目が覚めましたね」

そこにいたのは、

「悟空さん・・・？」

「ち、違います！悟飯ですよ！！」

確かに、髪型が悟空と違う。

そうか、悟飯か・・・。

「つて、えええ！？な、なんで悟飯さんがここにいるんですか？」

「そりゃあ、お父さんをおいけて来たんですよ。お父さん一人では、さすがに心配ですし・・・。今はベジータさんと、トランクスと、悟天が戦っていますよ・・・」

空中を見ると、三人が決死の覚悟で戦っているのが見えた。

「まさか。こうしてイヴさんと再び会えるとは、驚きました」

「ふふ。あたしも・・・」

とはいえ、笑ってばかりではられない。

今、実は三人とも押しやられているのが現状だ。

「あ、あたしも・・・行かなきゃ」

「ダメですよ。おとなしくしていなくちゃ！」

さ、さすが医者！

い、いや、そういう問題じゃなくて・・・。

「悟飯さんは戦わないんですか？」

「あなたをおいて戦うことはできません。あいつは、サイヤ人を皆殺しにするらしいんです。たとえ傷ついた人でも、容赦はしません。」

イヴさんを守らなくちゃ。だから、今は回復に専念してください」

そういつて、あたしを回復に回してくれた。

#7

「ぐわああああ！」

ベジータさんがやられた！

「うぎやあああ！」

トランクス！！

「ああああああ！」

悟天！！

「も、もう我慢の限界よ！」

そういつて、あたしは飛び出した。

「ブロリー！あたしの大切な仲間を、傷つけやがって・・・！！ゆるせないっ。ゆるせないっ！！！」

あたしのなかで、気が、大爆発した。

「カツ……カカロットオオオオ……！」

8

「た、倒しちゃった……。あ、あのブローを……！」

「やっぱイヴはすげえな」

「ゴテンクスより強い！」

「す、すぐすぎだよ」

イヴも倒したことで落ち着きを取り戻すと、思っていたのに……。

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!

「ぐ、悟飯っ。あぶねえぞ!!」

⌈
^
!
?
⌋

ドオオオオオ・
・
・

「あ、あぶな〜」

「イヴっ！もういい！やめろ！やめるんだ！」

しかし、あたしは言うことを聞かない。

否、聞けない。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「こ、こうなったら！悟天！トランクス！フュージョンしろ！俺が援護する！」

「「はいつ！」」

#9

ゴテンクスは、あたしに向かって攻撃をしてくる。

「スーパーストカミカゼアタック！！」

しかし、あたしは、それをかわすどころか、ビームで欠き消す。

「け、消された！？」

あたしは、ゴーストを消したあとに、火炎を繰り出す。

「あ、あぶなっ！！連続死ね死ねミサイル！！」

全部まともに受けたが、無事だった。

「な、なぬ・・・っ！？」

「グアアアアッ！」

強烈な光線を吐き出した。

「うわああああ！」

「ゴテンクス！！」

ゴテンクスは見るも無惨に倒され、気を失った悟天とトランクスがそこにあつた。

「イヴっ！！やめろ！仲間を殺す気か！！」

「な・・・か・・・ま・・・グオオオオオオ！」

一瞬、たじろいだが、再び悟天たちに襲いかかる。

「ぐわ・・・っ！」

悟天を獣のような手で掴み、グリグリと握りつぶす。

「あ・・・があああっ！！！！」

ミシッミシッミッ！

「こうなったら、やむを得んっ！！」

ベジータは気を高めた。

構えは、ファイナルフラッシュ。

「ベジータ！何をする！？」

「カカロット！いつも甘い貴様では、こんな真似はできんだろう！

だからこの俺がやってやるのさ！ここでパリカを倒すっ！」

「そ、そこまで・・・しなくても・・・！」

「もう、こうするしか方法はない。きっと今のパリカは、大猿と一緒にだ。暴れるだけ暴れるしかない。だから、倒す。戦闘できないくらいに打ち負かすしかない！」

徐々に気が高まり、膨大にあがっていく。

「いくぞっ。ファイナルフラッシュ！！！」

「ガアアアアッ！」

しかし、それに応じるかのごとく、あたしは口から光線を吐き出した。

やがて、光を帯び、ファイナルフラッシュが押されはじめる。

#10

ズギアアアアアアアアア

「うわあああ！！！」

ベジータは、サイヤ人に戻り、意識を失った。

「イヴっ！！いい加減にしろ！！どれだけ仲間を痛め付けたら気が済むんだっ！」

「ギイヤアアアアアア!!」

あたしの暴走は、留まることを知らない。
次の狙いに定めたのは、孫悟飯。

「い、イヴ!？」

「イヴさん。僕ら、はじめて会ったとき、覚えてますか?ピッコロさんに修行を受けてる最中に、お父さんの友達である、あなたが来てくれました。ピッコロさんの悪ふざけで、戦うことになりましたよね。僕、まだ、そのときは、戦い方もなにも知らなかったのに。少しかだけピッコロさんに教えてもらったことで、あなたに勝ちました。そのあと、ナメツク星にも行きましたね。イヴさんの体が、ギニューに取られたときは驚きましたよ……。で、知ったんです。イヴさんは、優しく、強く、いい人だって!!そして、この戦いも、僕らの、最後の決闘です!あなたの全てを……。僕に……。ぶつけてください!!」

「悟飯……。!!」

「ゴ……。ハ……。ン……。グアアアアアアアア!!」

#11

あたしは、獣の姿から、本来のイヴの姿に戻っていった……。

「っはあ……。!!」
「悟飯さん……」

「よかった。元に戻った!」

あたしは、周りを見た。

大怪獣が荒らしたかのように砂漠が穴だらけ、そこに倒れる、ベジ
ータ、トランクス、悟天。

「あたし……。仲間に、酷いことを……」

「いいえ。大丈夫です。みんな許してくれると思います。で、やり
ましょう！僕らの、最後の決闘を！」

「いいですね！やりましょー！！」

1 2

あたしたちは戦った。
本気で、本気で。

「どうしました！悟飯さん！本気じゃないでしょう！！」

「当たり前です！！」

二人の戦いは、まさしく最強の戦いになりました。

ド
ド
ド
ド
ド

ゴ
ア
ア
ア

バ
ギ
イ
イ
イ

ズ
シ
イ
イ
イ

ズギヤアアア

ヴオガアアアア

ドガアアアア

ドツカアアアン

「つく・・・」

「次の一撃で、終わりにしましょうか・・・」

「そう・・・ね・・・」

二人は最後の攻撃の準備をした。

トランス
変身

「やっぱり、あたしの最後の攻撃、やっぱりこれじゃないとね・・・」

「じゃ、いきますよ・・・!!」

あたしは一気に気を高める。

もう超サイヤ人にもなれないほど体力が失われているが、必死に最後の気を高めた。

「はあああああああああ!!」

砲の穴の部分に、光の玉を作り出す。
それは徐々に大きくなる。

「か~~~~~め~~~~~は~~~~~
め~~~~~波~~~~~!!」

ビッグビームガン
「大光線砲っ!!」

二つは、混ざりあつて、消えた。

13

「ありがとう。悟飯さん」

「はい。イヴさん」

勝ったのは、悟飯だった。

最後には、かめはめ波の勢いに負けて、すべてがこっちにくらった。
あたしは倒れて、もとの姿にもどった。

「みんな・・・ごめんなさい」

「まったくだ。貴様のせいだ!」

「びっくりした」

「でもすごかった」

悟天もトランクスもそう言って笑ってくれた。
あたしって、なんていい仲間に巡り会えたんだろう。

「じゃ。またな！イヴー！」

「また！！」

いや、きつともう、会うことはないだろう。
そう思っていた。

「・・・また、ですか・・・？」

再び会うのは、そう、遠い日ではなかった。

f i n

（後書き）

これをもって、生体兵器シリーズ？を完結させるつもりです。

このあとは、他の自身の小説とのコラボがしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032z/>

「生体兵器の少女 Z」番外編～それからのあたし～

2011年12月3日22時51分発行